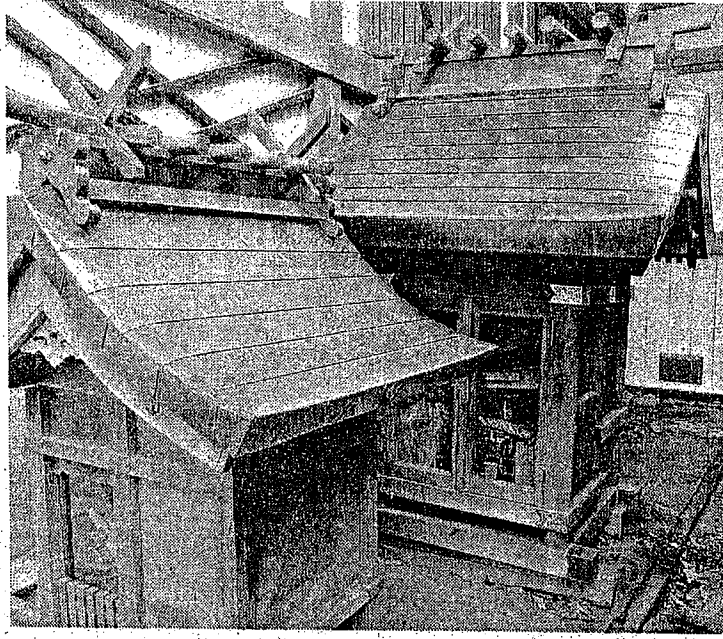


被災地の支えに

「社」を寄贈



福島県いわき市の佐麻久嶺神社に贈られる社(奥)―大阪市中心部の玉造稻荷神社

東日本大震災で被災した神社を支援しようと、府内の若手神職でつくる「大阪府神道青年会」が10日、神を祭る小型の「社」を福島県いわき市の2神社に寄贈する。社は府内の神社に予備として保管されていたもので、同会の森山公康会長は「被災地の神社が元の場所です。地域の人の支えになれるよう支援を続けたい」と話している。

大阪の若手神職ら、福島・いわきの2神社に

震災後、同会メンバーらは、被災地の神社庁の要請などにより被災した神社の支援活動などに従事。社が津波で流され鳥居だけが残った神社があるなど、悲惨な状況を目の当たりにしたという。

こうした経験から社を贈ることを計画。府内の神社に予備の社がないか探し、玉造稻荷神社（大阪市中心部）と海老江八坂神社（同市福島区）で1社ずつ（高さ各185センチ、210センチ）を確保した上で、今年3月から被災地の神社庁を通じて、この社のサイズに合う

土台がある被災地の神社を探していた。

その結果、福島県いわき市の佐麻久嶺神社と諏訪神社に決まった。社は9日にトラックで大阪を出発し、10日に現地に届けられ、現地の神職や地域住民らにより設置される予定という。

森山さんは「社のほかにも、賽銭箱や鈴などの備品の協力など、神職ができることはまだあるはず」と話している。同会は、8月19日（21日）にも福島県南相馬市の被災神社を訪れ、倒壊した社の撤去などを行うことにしている。